運動の楽しさを味わいながら，主体的に運動に取り組む子供の育成

薩摩川内市立東郷学園義務教育学校
教　諭　　森　川　　啓

1　はじめに

本校は，平成 31 年４月に開校した義務教育学校で，９年間を見据えたカリキュラム編成や一貫した指導の充実に努めている。また，コミュニティ・スクールとして，目指す子供像や教育ビジョンを保護者や地域と共有し，協働による学校運営を行っている。

学習指導要領や令和５年度までの子供の実態，学校教育目標などを踏まえ，研究主題を「運動の楽しさを味わいながら，主体的に運動に取り組む子供の育成」と設定し，実践に取り組んだ。

2　目指す子供の姿

子供の実態を踏まえて，目指す子供の姿を次のように設定した。

1　体を動かす楽しさや心地よさを味わい，運動に関わることが好きな子供
2　主体的に運動に関わろうとする子供
3　自己や集団の課題解決に向けて粘り強く取り組む子供

3　教科体育における取組

⑴　協働授業の実施

「子供の実態や，９年間の学びの系統性を踏まえ，前期課程と後期課程の教諭が協働して授業づくりを行うことで，体力や学力の向上を目指す」ことをねらいとして実施している。体育科・保健体育科では，前期課程に後期課程教諭が入り，専門性を生かした指導を行っている。

【協働授業の様子】

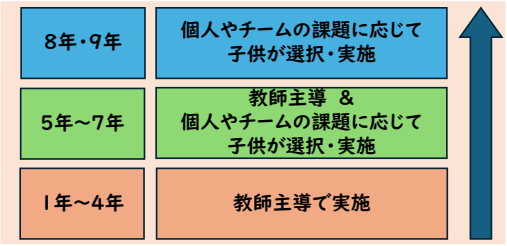
【後期課程教諭による前期課程の子供へ指導】

⑵　共通実践の取組

９年間を通した一貫した指導を行うことができるよう，体育科・保健体育科の授業における共通実践事項を明確にした。

ア　運動遊び・補強運動の実施

主運動につながる運動遊びや補強運動に取り組む時間を，毎時間設定した。特に，後期課程では，具体的な運動例を示し，個人やチームの課題に応じ，子供が主体的に取り組めるようにした。



【運動遊び・補強運動の取組系統図】

イ　活動の選択ができる場面の設定

「一斉指導」や「同一内容」ではなく，個人やチームの課題に応じて，活動を選択できる場面を設定した。特に，子供自身が課題を明確にするための時間設定や，教師の発問を重視した。

【チームで課題を確認】

【課題に応じた活動】

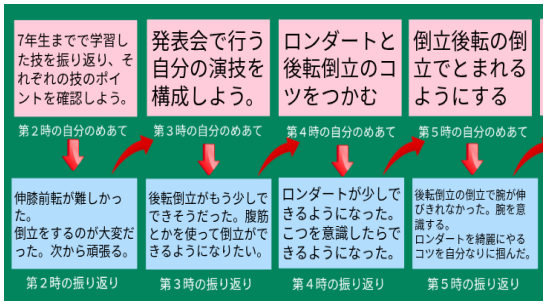
ウ　ＩＣＴ機器の効果的な活用

子供が課題を把握することや，子供同士が関わることができるようにするために，モデル動画を視聴したり，動きを撮影したりするなど，積極的にＩＣＴ機器の活用を図った。

エ　見通しと振り返りの充実

導入時に個人やチームの目標を明確にし，その目標達成のために，どのような取組をすればよいか見通しをもつ時間を確保した。終末時には，「何ができたか」「新たな課題は何か」を振り返り，次の時間の

見通しをもつことができるようにすることで，子供が自らの学びをデザインできるようにした。



【振り返りカード】

4　教科外体育における取組

(1)　持続可能な全校での取組

「ちょっとトレーニング」を略して「ちょトレ」と称し，教室でできるトレーニングや運動遊びを全学級で行った。行う内容は，「体力・運動能力調査」の結果を基に，児童生徒会保健体育部で検討し，週替わりで示すことで，児童生徒が主体となって活動することができた。

(2)　自主的に運動に取り組む環境の設定

年間を通して，朝の時間に体育館を開放し，縄跳び運動や綱引きなど，子供が自主的に運動に取り組むことができるような環境を設定した。自らの目標達成のために意欲的に取り組む様子が見られた。

【朝の自主的な運動】

【持久走大会に向けて取り組む様子】

5　家庭・地域と連携した取組

(1)　学校保健委員会での取組

学校保健委員会の年間テーマを，「運動を通した親子の触れ合い」と設定し，具体的な取組を各学年で計画・実施した。また，取組の様子を，特集としてＰＴＡ新聞に掲載し，啓発を行った。

【学校保健委員会】

【親子で運動・ストレッチ講座】

(2)　地域との連携

「コミュニティ・スクールの日」と称し，地域・保護者と子供が，一緒に運動を楽しむ機会を設けた。運動内容は，「ペタンク」「グランドゴルフ」など，高齢者も子供も共に楽しむことができる運動を中心に行った。

【コミュニティ・スクールの日(11 月第２土曜)】

6　成果と課題

(1)　成果

ア　体育科・保健体育科における系統性を踏まえ，共通実践事項を明確にするとともに，各学年で確実に取り組むことで，一貫した指導の充実を図ることにつながった。

イ　運動をすることに対する子供の肯定的評価の割合が増えており，運動の楽しさを味わいながら，主体的に運動に取り組む意識が高まった。

ウ　運動を通して親子で触れ合う取組については，習慣化を図ることができつつある。また，多くの家庭から肯定的な感想が寄せられている。

(2)　課題

ア　運動に対する肯定的評価をより高めるために，学年や子供の実態に応じた取組を継続して行っていく必要がある。

イ　生活習慣の確立など，健康面からアプローチが必要な子供がいるため，家庭や地域との連携を図っていく必要がある。